



自身も家庭菜園に取り組みされており、今回研究農場見学を楽しまれた山本さん(左)と、品種開発について説明した本部長の福永(右)。



山本 浩之氏(アナウンサー)

福永 寛(研究開発本部長)

野菜品種開発のトレンドと家庭菜園の魅力を語る

対談日:2025年7月8日(火) 場所:タキイ研究農場(滋賀県湖南市)

Profile

やまもと ひろゆき
山本 浩之

「ヤマヒロ」さんの愛称で知られる大阪府出身の人気アナウンサー。2013年に関西テレビから独立し、現在は『ちゃちゃ入れマンデー』『よんちゃんTV』などのTV出演のほか、MBSラジオの「ヤマヒロのぴかいちラジオ」「ヤマヒロのぴかッとモーニング」「ヤマヒロのお寺さんSUNモーニング」のパーソナリティとしても活躍中。4年前から自宅のある奈良県で家庭菜園を始め野菜作りの魅力にはまる。自身が出演する番組を「農ラジ」と称し、「農RADIO NO LIFE」をモットーにYouTube「ヤマヒロちゃんねる」でも菜園ライフの様子を発信している。

MBSラジオの朝の人気番組「ヤマヒロのぴかッとモーニング」など多方面でおなじみの、ヤマヒロさんこと山本浩之さん。番組内での「農ラジ」コーナーへ編集者が出演したことをきっかけに、弊社創業190周年記念企画として夏のタキイ研究農場(滋賀県湖南市)にお招きしました。

圃場で栽培中の果菜を見学いただいたのち、弊社の品種開発の動向や、山本さん自身が趣味で楽しまっている家庭菜園でのエピソードや質問を交えながらの対談となりました。(編集部)

酷暑の影響出ている？

山本さん(以下:山本)…4年前から自分で畑をするようになって、やっぱりプロの人たちが作る畑ってどんな感じなんだろうと思いつつながら興味深く見学させていただきました。いろんな品種を開発されていますけど、毎年気候が変動するじゃないですか。最近でも酷暑が続いていて、それに対応した品種開発は難しいんじゃないかと思うんですが、どうされているんですか。

福永本部長(以下:福永)…10年20年前に出した品種も現役で使われていますが、産地の状況も変わってきています。例えば、岐阜県の飛騨高山に国内でも大きな夏秋トマト産地があり、標高が400mくらいから800m以上のところまであります。標高が高いところは、おそろしく10年ほど前までは夏でも夜温が20℃以下で、昼間は30℃前後くらいだったと思うんですね。

山本…確かにそうかもしれません。

福永…それが今では日中35℃を超える日もあると聞きます。昔の品種をそのまま使うと暑さで日焼けしたり、着色が悪くなってしまうなど、温暖化に伴ういろんな問題が出てきます。そういう事態に慌てないよう「そういうことが起きるかもしれない」と予測して品

種育成しています。

山本…品種育成とは具体的にはどういう風にされるんでしょうか。

福永…基本的には環境変化に対応できる品種を育成、開発するというのが我々の仕事です。今までより暑さに強い品種開発というのはまさにその一つですね。

トマトがヒビ割れるんですが…

山本…なるほど、今直面しているのはまずは高温対策だと思うんですが、特に大玉のトマトを栽培するとボクラは大玉ヒビが入っちゃうんですよ。大玉トマトの場合、高温で困ることは何かありますか。

福永…お話のように、生産者の方も困られるのがまず裂果です。トマトの肩あたりの果皮にヒビ割れが入ります。特に家庭菜園の場合は露地で作られるケースがほとんどなので、雨が直接当たったり、露がついたり、あるいは日差しがかなり強く当たりますよね。人間が日焼けして、肌がカピカピになり皮がめくれたり割れたりという現象と同じようなことがトマトでも起きてしまいます。露地栽培は非常に難しいと思います。

山本…難しいですね。例えば、プロの生産者の方たちがハウスで作られてい

る大玉のトマトというと、こういった高温対策をされているんですか。

福永…例えば、ネット状の遮光資材があり、それをハウスの上に張ったり、あるいはハウスそのものに遮光のための白いペンキのようなものを塗ったりという方法もあります。あと、ハウスの中は循環扇という大型の扇風機みたいなもので空気を循環させ、熱気がたまらないような工夫をされています。ほかにはミストで散水したり、通路に打ち水をして気化熱で温度を下げるなど、さまざまな対策をされています。

「黄変果」って何なんですか？

山本…先ほどトマトのハウスで「黄変果」に強いという品種を見せていた

いたのですが、黄変果って何なんですか？

福永…「黄変果」というのは果実の上の部分赤く着色せず、黄色くなってしまうた果実のことをいいます。

山本…へえ、それは品質に影響するんですか。

福永…トマトは大体ヘタを下にして販売されていますので、消費者の方は一度ひっくり返してヘタ周りを見てから買われると思います。袋売りじゃなくて一個売りとされていると、ヘタ周りが黄色いと敬遠されますし、実際ヘタ周りが黄色いトマトはその部分が少しかたくなるので、食味も少し落ちることがあります。生産者の方からの目線ですと、それで等級が下がると販売価格も下がるので大きな問題です。先



↑ 展示圃場を案内した次長の新に山本さんから次々質問がとぶ。



↑ 「桃太郎ブライト」を手にトマトの裂皮しやすい箇所を説明する福永。

ほど見ていただいた「桃太郎ブライト」はそれを起きにくくした改良品種なんです。

山本…ハウスの中で並んでいましたけど、見事にきれいでしたね。全体にムラなく赤くて。

福永…赤くなる前はヘタ周りが濃い緑色の品種がほとんどで、果実の下の部分は少し薄い緑色というか白っぽい色をしています。ヘタ周りの部分だけは濃い緑色をしています。

山本…濃かったですね、ほかの品種はね。

福永…はい。それが熟していくときに徐々に緑色がなくなって赤く着色する仕組みです。トマトの赤色はご存じのようにリコピンという色素で、リコピンの着色はおおよそ20〜25℃くらいが適しますが、昔はトマトが栽培しやすい環境が作れていたため、赤く着色しやすいという問題は起きづらかったんです。最近では山間地域でも夏には30℃を超えますし、35℃付近になるとリコピンがうまく生成されず、高温でも生成されるβ-カロテンが目立ち黄色がかった色になるんです。

山本…そういう声は、直接研究部門の方に届いてくるんですか？

福永…直接ということだけではありませんが、産地を回っている営業マンから現場の声として、あるいは得意先で

ある各地の種苗店様や農協様からこういった困りごとがありますというような相談としてお聞きします。逆にそうした声が出る前に、私どもが日々の研究から問題になるかも、と先回りするケースもあります。「黄変果」に関して

もそういった情報から取り組みを始め、ヘタ周りの濃い緑色をなくすことで着色しやすくするように改良したわけです。緑色が濃い場合はクロフィル、つまりは葉緑素が退緑してから赤くなり始めますが、この退緑するという工程を省いて色が回り始めるので、着色がスムーズになりました。

山本…よくそんなこと、成功しましたね！ そういった育種は具体的にどうやっているんですか？

品種開発ってどうやってるんですか？

福永…それはそういう育種素材が、探せばあるんです(笑)…。



↑ 「千恋」トマトのポリポリ食感に手が止まらない山本さん。



↑単為結果ナスの説明を聞いて、品種開発の多様性と費やす年月にもその大変さを実感。



↑展示されている中玉トマトの「フルティカ」やミニトマトの「千果」を見て、こんな鈴なりに実をつけるんですねと感嘆の声。自作のミニトマトはこんなに実をつけないと驚きの様子。



山本…そんなあるんですか！

福永…「ジーンバンク」ってご存じですか？ 遺伝資源、つまり野生種など品種に利用できる素材を保存している機関が日本にも海外にもあります。そういったところに、「桃太郎ブライト」の場合であれば、ヘタ周りが濃い緑色にならないタイプのトマトという遺伝資源があって、それを品種に利用しまし

た。

山本…遺伝資源はトマトに特化してあるんですか？

福永…トマト以外にもいろんな品目があり、日本のジーンバンクもさまざまな品目を扱っています。

山本…もう長い歴史の中で、品種改良の戦いがあるわけじゃないですか。気候もそうですが、それに打ち勝つためにはいろんな素材やノウハウが隠されているということですね。

福永…遺伝資源を使うことができること、最近では求める遺伝資源がないものは自分たちで素材を作り出すなど、両方面からやっています。

山本…なるほど。もう一つトマトに関してなんですが、ほかにも流通面から求められる特性についてはどういったことが挙げられますか。

福永…流通面では、日もちの問題、やはり暑い時にやわらかくなりたくない、つまりはできるだけいい状態で1日も長く店頭に並べておけるといった形質が一番求められます。

山本…あらゆる社会情勢に応じた改良をしていくということですか。

福永…日もちでいうと、トマトは輪切りにすると壁みたいな部分とゼリーの部分に分かれますが、壁の部分を少し厚くしてあげると、打ち身がでにくくなります。

山本…そんなことも可能なんですか。

壁を厚くするとか？！

福永…そういう育種素材があるんです。

山本…すごいな。厚さまで変幻自在というかわえられるわけなんですね。

福永…当然同じ品種でも栽培方法によって壁の厚みが多少変わることもありますが、同じ条件で作ったときにほかの品種より少し厚くなる、そういったものは品種育成で実現しています。

PCナスシリーズに驚き！

山本…トマトについてだいぶ詳しくお伺いしましたけど、ナスも産地の方の要望から新しいものが出てきていると聞きました。

福永…ナスも10年以上前からずっと生産者の皆さんから「何とかしてほしい」と課題を相談されてきました。ナスの生産では果実を確実に着果させるためにホルモン処理という作業が必須です。

ミツバチを使って交配を行う方もおられますが、寒い冬や春先、高温時などはハチが働かなくなることがあります。そうした過酷な時期にはどうしてもホルモン処理が必要となります。また、ミツバチを使っている方の中にはアナフィラキシーショックのリスクを抱えている方もおられます。ホルモン処理の作業は実はナスの生産に関わる労働

時間全体の25%近くを占めるんです。家庭菜園では理解が難しいかもしれませんが、ほかの作業も重なりますので、負担がかなり大きい作業なんです。

山本…きっちり着果しなければ収益が上らないプロの生産者の方々にとっては、ホルモン処理が大変な労力になるんですね。

福永…この作業がなかったら、もっと栽培面積を広げられるのというようなお声をずっと聞いていました。「それならホルモン処理、もつと言えばハチで交配しなくても勝手に着果する品種を作りましょう」ということで単為結果するナス、PCシリーズが誕生しました。

山本…え、じゃあもうホルモン処理をしなくていいんですか？

福永…はい。もう自然に果実が付きます。ちょっとつきすぎて困るくらいですけど。

山本…画期的ですね！ いつごろ誕生したのですか。

福永…「PC筑陽」という品種が先行しましたが、この品種の試作を開始した2015年ごろから数えて約10年になります。

山本…それまで通常のナスの品種を使っておられた農家さんは皆さん切り替えられたんですか？

*PCはparthenocarp(単為結果)にちなみます。



← 自身の菜園でも栽培されているオクラにはことさら熱心に質問を重ねる。



↑「1穴4本立ちでの栽培」が正解と聞き安心する山本さん。

福永…実際には我々より早く、単為結

果性をもった品種は海外にありましたが、国の研究機関も作っておられたんですが、完全ではなかったんです。暑いときや真冬になり温度が低すぎると着果しないという課題がありました。

そこを改良して、暑くても寒くても果実がつきやすくなるような品種育成をしました。

山本…しかし、交配をしなくても実がつく株を発見した研究員の方はすごい観察力ですね。年中そうやって、疑問をもちながら観察し研究されているんですか。

福永…趣味みたいに(笑)。根っからこういう仕事が好きなんだと思います。

山本…確かに(笑)。好きじゃないとできないですよ。

福永…作物のちょっとした変化が気になる、追求しなくては気が済まない

という感じですよ。

山本…すごいな！それがすごい商品に結びついていくんですもんね。

福永…ブリーダーってそういうことが好きという人間の集まりなんです。

来年はチャレンジ！ カボチャ「グラッセ」と オクラ「ヘルシエ」

山本…そうそう、カボチャの展示圃場にあった「グラッセ」。果皮が黒くておいしそうですよ。

福永…ありがとうございます。「グラッセ」に付与したうどんこ病耐病性というのは、カボチャを栽培される農家さんの大変な困りごとでもあります。

山本…うどんこ病は私も経験していましたが、今、圃場で見せていただいた「グラッセ」にはまったくうどんこ病の症状が見られなかったのでびっくりしましたね。だいたいカボチャってうどんこ病が発生して、最後は株全体が真っ白になるのが当たり前だと思っていましたから。

福永…家庭菜園でもうどんこ病はすぐ出やすいですからね。

山本…いいですよ。来年はもう「グラッセ」を栽培します。

福永…ぜひお願いします。

山本…オクラはボクの畑でもずいぶん

草丈が高くなってきて、花がなかなか咲かないと言ってたんですが、先ほど畑で教えてもらったら、じつはすでに花が咲いていて見落としてたみたいですよ。「ヘルシエ」すごいですね。ネバネバがすごいいとお聞きしました。

福永…なかなか花が咲かないと言われてきたけど、「ヘルシエ」はすごく馬力があり草勢が強くなりやすく、花が遠くなるんです。

山本…葉っぱの勢いすごかったです。

福永…生産者の方々は1穴の中にタネを4〜5粒まいて、株ごとを競争させながら細作りするんです。

山本…あ！それボクもね、解説書にオクラは「競争させろ」とあって、間引く必要がないと書いてあったので、間引かなくてそのままにしています。正解ですか？

福永…正解です。

山本…風に負けないようにしようと株ごとを麻ひもでくくっています。オクラは菜園でも楽しみですよ。

福永…弊社の瀧井会長が社長のところから、ずっと申していることがありまして、「タネは信頼を売っている。一回でも裏切ったら二度と信頼してもらえない。絶対信頼を失うようなことをした

らあかん」と。新入社員のところからなので、もう30年ほど言われ続けています。

山本…そうか、それが190年続く歴史ですね。その信頼で、なおかつ新しいものにチャレンジしていくということですね。あとはそのタネでちゃんと家庭菜園で栽培できるようにがんばります。いいタネをどんどん開発生産してください。

福永…いいタネを、いい苗をお届けします。

山本…でもね、ほんとタネから作る喜びってね、やっぱりうれしい。家のポットとかで黒豆をまいたら芽が出てきてくれたり、そういう時うれしいですね。これからもどんなものが出てくるのか楽しみです。いろいろと新しいものを自分も作りたいと思います。頑張ってください。

タネという信頼を売る タネから作る喜び

福永…弊社の瀧井会長が社長のところから、ずっと申していることがありまして、「タネは信頼を売っている。一回でも裏切ったら二度と信頼してもらえない。絶対信頼を失うようなことをした

らあかん」と。新入社員のところからなので、もう30年ほど言われ続けています。

山本…そうか、それが190年続く歴史ですね。その信頼で、なおかつ新しいものにチャレンジしていくということですね。あとはそのタネでちゃんと家庭菜園で栽培できるようにがんばります。いいタネをどんどん開発生産してください。



← 来年作りたいという「グラッセ」をバックに笑顔の山本さん。